

カピタン江戸参府に同行したシーボルトは、この旅行のために観測隊ともいえるものを編成し、そのため理学関係助手としてジャバ病院薬剤師 Heinrich Büger と画家 de Villeneuve をよびよせ、なお日本人研究補助数名が選ばれてなかに高良斉、二宮敬作があった。文政の年旧3月1日11時近く、一足さきのビュルヘルは箱根峠の高さを測るためトリチュリ管に水銀を充す準備をし、おくれで箱根の関へ12時少し前についたシーボルトは太陽高度測定をした。それから、多分、シーボルトが水銀バロメーターによる高度測定を、恐らく二宮敬作などと共に数回行い、一方ビュルヘルは沸点降下法で高度を求め、降下3度、フンボルトの換算で約3,000尺の結果を得た。実際観測時での仕事の分担細部は、さして重要ではなく、これらの観測の計画、立案、指導者はシーボルトであり、シーボルトが観測したとって何らさし障りはないのである。

二宮敬作がシーボルトの指示によって富士山に観測登頂を決行したのは、文政11年(1828)旧5月であるが、根本氏の要求される「証拠」は、決定的ものは存在しない。その理由は、シーボルトも二宮も、否シーボルト事件関係者はすべて累を他に及ぼすことを恐れ「拒否権」を行使し、これを公にしなかったからである。しかし、二宮敬作がこの事件に連座して「江戸構、長崎払

の判決をうけた理由に、温泉岳の高度を水銀バロメーターで測ったことが挙げられている。その値は4287英尺。この温泉岳高度測定が、もし江戸参府以前(シーボルトはそれまでに2年半を長崎に過した)ならば、箱根越えでは当然高度測定の手伝をした筈であり、参府以後であっても、少くもその時水銀バロによる高度測定法の説明を聞いたと推定される。というのは、この度の参府に際しシーボルトは高橋景保(江戸司天台主席)にも水銀バロメーターによる高度測定を伝授し、これによって、鳥海山、白山、御岳などを測定する示唆を与えた模様であるから。こうして、日本での水銀バロメーターによる高度測定は、シーボルト、二宮敬作にはじまるといって、まづ、間違いはあるまい。因みに従来の量地家による高度測定は、いわゆる triangulation 法に類するもので、鳥海、温泉、金峯、高館、月山、羽黒などが文化年間までに測られていた様で、出羽の田中万春などに負うところが多しという。

さて、筆者はもうこれ以上この問題について読者を引きとめようとは思わないが、どうであろう。気象学界にもう少し論争があつていいのではあるまいか。カフカのものといえる何とも奇妙な、余儀ない論争にまきこまれて見て、これで、もし筆者自身に関係がなければ、ふとそう考えたのであつた。(1968年8月)

夏期大学講座「新しい気象学」(第2回)経過報告

第2回の夏期大学講座は予定通り7月22~27日に気象庁大講堂で開催された。出席は昨年同様、90名近くで、高校の教師の方が多かった。講義はおおむね予定通り行われ、また24日の午後には気象研究所の、27日の午前には気象庁の見学が行なわれた。出席者にアンケートを求めたところ、約1/3の30名の方々から回答が得られた。今後の参考のため、その結果を要約すると次のようである。

1. もっとも興味を持たれた講義題目

高層天気図(13)、大気大循環(10)、メソ気象(9)、天気予報(8)、台風(4)(カッコ内は回答数)

2. 今後要望される講義題目

気候学、数値予報、雲物理学、成層圏、古気候、大気汚染、天気予報、長期予報、世界各地の季節変化、気象統計学、微・小気候学、都市気候、雷雨現象、気象衛星、気象と病気・公害、空中電気・地磁気、身近かな気象、理論気象、気象測器、台風予報はなぜ外れるか、大循環・高層天気図は時間をかけて詳細に。

3. 講義の形式、連絡等についての要望

涼しい部屋で講義をききたい。マイクの不備。スライドは適量に、テキストはもっと事前に配布すること。参考文献をのせること。参加者の名簿をつくれ。見学は是非毎回やってほしい。討論の場を。地方開催も考えてほしい。映画フィルムの借用について便宜を計られたい。数式を使った説明を。程度を高く。一般向・専門向を半々に。教材に生かせる実験もしくはこれについての解説。来年度は講師を全面的にかえてほしい。

4. その他

開講の期間については7月下旬を希望する者がもっとも多かった(22名)。その次は8月下旬を要望された人が4人あった。

5. 講義テキストについて

事務局にはなお講義テキストの残部がありますので、希望者は学会事務局まで必要部数をお申込み下さい。定価1部400円(送料別)

(根本順吉)